

合同での火祭りが計画されたという話も去年伺っている。

ここに至るまでの、長い複雑な歴史がある。それぞれの立場もあり、色々と難しいこともあるかもしれないが、お話を聞いていて、いずれまた神仏習合に戻って行くかもなんて思ったりした。

お風呂で頭を解し脱力したが、再度気を引き締め、大日坊でいざ修行である。夜はまだまだ長い。

4 大日坊～湯殿山神社

蕨 由美

・夕暮れの湯殿山総本寺大日坊に到着

旅も2日目の10月19日午後、羽黒町手向の正善院黄金堂を後にし、バスは大網の湯殿山総本寺大日坊を目指し、夕暮れの出羽三山山麓を走る。空は、昨日からの雲もすっかり晴れ、月山の姿もくっきり夕日に映え、絵のように美しい。途中、かたくり温泉入浴、外へ出ると陽は傾いて、西の山々の稜線に吸い込まれるように沈んでいく。

5時を告げるチャイムの音が流れる六十里越街道沿いののどかな集落を通り、「夕焼け小焼けで日が暮れて～」の唄のように寺の鐘が鳴る中、5時15分、大網の湯殿山総本寺・瀧水寺大日坊に到着した。



秘仏開帳中の大日坊本堂でのご祈祷

・夜の「湯殿山大権現御法楽」の御祈祷体験

玄関を上がり、男女別に用意された大部屋に荷物を入れ、休む間なく5時半に本堂へ。これから今回の旅での体験のひとつ、「御祈祷」をいきなり実体験することとなった。

本堂の右手には大きな大黒天、左手にはにこやかな弁才天が祀られていて、思ったより庶民的な雰囲気にはっとする。内陣は網戸で仕切られ、その奥には、湯殿山の御縁年、丑歳と未歳だけ御開帳の御本尊の胎藏界大日如来像が遠くに輝いている。

ご住職の第95世遠藤宥覚師と3名の僧が入堂し、祈祷が執り行われる。参加者一人一人の住所氏名が呼ばれ、真言密教の護摩が修された。「般若心経」などの声明、さらに、「南無帰命頂礼湯殿山大権現」から始まり湯殿山に祀られる諸仏に加護を願う「湯殿山大権現御法楽」の読経のリズムに合わせて、内陣手前左右で錫杖がはげしく揺すられ、その音が堂内に響き渡る。そして最後に大きな梵天を参籠者の頭上で振っての加持祈祷がおこなわれた。

・湯殿山と大日坊の歴史

外の寒さが肌に感じられるころ祈祷が終わり、遠藤師が護摩行の意味と大日坊の歴史をお話くださった。

中世まで出羽三山は月山・羽黒山・葉山で構成された神仏習合八宗兼学の三山であり、湯殿山はその出羽三山総奥院であった。

出羽三山の山域は女人禁制であったので、三山入り口の一つ大綱口のあった別当寺の瀧水寺大日坊は、七五三掛口の注連寺と同じく、女人参詣所としてもにぎわった。大日坊の御本尊大日如来像は、空海が女人を哀れんで自ら彫られた湯殿山大権現とのこと。春日局も家光の三代将軍への祈願のため来山、その際に奉納された金剛界大日如来像、建堂の棟札など寺宝を今に伝えている。

江戸時代初頭、羽黒山・月山を羽黒山別当職になった天宥が徳川家の庇護を受けるため東叡山寛永寺末の天台宗に改宗、これに抵抗して湯殿山派の4ヶ寺のみ真言宗の宗旨を貫いた。

浅間山噴火による大飢饉の天明3年、96才の真如海上人が生身で入定し、その三年三ヶ月後弟子らにより掘り出され清められて即身仏となられた。托鉢でいただいたものも村人に分かちあうような慈悲の方で、死後も体を残して衆生を救うため七十数年にわたる木食を続けられた。「肉体も魂もここに生きておられる」とのこと。

明治維新の時は、廃仏毀釈をとまなう強制的な神仏分離令により、羽黒山・月山の寺院や宿坊が次々と神社へと転向していく困難に耐え、真言密教として出羽三山から独立して湯殿山の信仰の法燈を伝えてきた。さらに昭和11年(1936)に、地すべりの災害によって里へ下り、現在の境内に本堂のほか鎌倉時代創建の仁王門を再建、今に至っているとのことであった。

そのほか、寺宝の飛鳥時代の銅造如来立像(2008年重文指定)や大日坊の旧境内地にそびえる皇檀の杉の伝承など興味深い話は尽きないが、夜も更けてきたので、即身仏の拝観をお願いし、そのあと7時から精進料理の夕食となった。

・堂内の御沢めぐりの後、旧大日坊の故地へ

3日目の10月20日、5時過ぎに起床。昨夕の夕焼け空がうそのように雨が降っている。6時から本堂で朝の勤行、7時に朝食。

出発前に本堂の周りの回廊に並ぶ御沢胎内めぐりの諸仏を拝見する。子安地藏や飯縄権現像など「仙人沢」の諸仏を祀ってある。行人塚のある湯殿山大鳥居の場所から湯殿山宝前に至る梵字川の峡谷には、江戸時代まで権現・如来の像を安置し、「御沢駆け」と称して巡拝する行が行われていた。御沢駆けは、溪谷を胎内に見立て、そこを抜けて命の再生を感得するという湯殿山修験の重要な行場であり、仙人沢の名は入定して即身仏となった行人たちの厳しい修行の聖地を意味した。現在は本堂の周りの諸仏巡拝で、その御沢駆けの御利益がいただけるとのこと。神仏分離の際に廃された親しみある仏像を間近で拝観できる場でもあった。

8時にバスですぐ近くの大日坊の元境内地に向かう。江戸時代は行間(ゆきま)四十二間に梁間十二間の本堂など大伽藍の並ぶ境内であったが、明治8年火災の後再建、

昭和11年の地すべりで現在地に移り、今は石造物と県指定の天然記念物の「皇壇の杉」などにその姿がしのばれる。皇壇の杉は、東北鎮撫のため下向しこの地で亡くなった景行天皇の皇子の墳墓に植えられたものという。雪の重みにその枝を下に曲げてそびえるその姿は見事で、千年を超す樹の生命を感じさせる名木であった。

帰路は六十里越街道を歩いて下りながら、朝日村一の大きさを誇る安永9年(1780)建立の庚申塔を見てから、大日坊の仁王門を見学する。山形県最古の中世建築で県有形文化財の三間一戸の八脚門の内部には、仁王像(市文化財)・風神雷神が祭られ、草履や草鞋などが奉納されている。仁王像が後ろ向きになっているのは、ここに再建した時に前後逆になってしまったからとか。

仁王門の立つ懐かしい風景を振り返りつつ、9時20分六十里越街道からバスで移動し、注連寺(ちゅうれんじ)へと向かった。

・森敦の「月山」の舞台・注連寺

10分ほどで七五三(しめ)掛(かけ)の注連寺に到着。本堂前の回向柱も降りしきる雨にぬれている。

注連寺創建も空海の湯殿山開山を伝える湯殿山別当四カ寺の1つ。大日坊と同じく女人禁制だった湯殿山の中で女人のための遥拝所として栄えた。寺名の「注連」とは、「神域と現世の境界にある結界」を表す注連縄のこと。境内の神木の「七五三掛桜」に注連縄をかけていたという。

名僧鉄門海上人の即身仏が安置されて、松尾芭蕉も奥の細道行脚の際訪ねた寺院であったが、明治時代に堂宇は焼失。唐破風向拝付きの本堂が再建されたが、神仏分離後は大日坊同様に寺勢が衰え「破(や)れ寺(でら)」の雰囲気だった。昭和26年当時ここを舞台にしたのが、森敦の「月山」。その後現在のように復旧され、昭和61年には境内に森敦文庫が建てられている。「月山」登場する「和紙の蚊帳」が文庫の2階に再現されていた。冬



七五三掛の注連寺

の寒さに耐えかねて「祈祷簿」(お得意先名の帳簿)の紙を張り合わせ、「カイコみてえにつくった和紙の蚊帳」にこもり厳冬をすごしたというエピソードが思い浮かぶ。

本堂での住職の話の後、案内されたのが、建物の天井を彩る数々の天井絵画。故村井石斎画伯や十時孝好画伯による伝統絵画のほか、現代作家によるユニークなポップ調の絵画が楽しい。

本年2009年3月『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』で、注連寺が二ツ星に選定されたことなどにより、湯殿山の宗教史の一面を一般の人の伝える観光スポットとしても定着しつつあるようだ。

・田麦俣集落の兜造り多層民家

この旅の最後湯殿山参拝の前に、六十里越街道沿いの田麦俣の多層民家を見学。田麦俣は六十里越街道の中継点であり、また湯殿山への参拝が盛んになると宿場の性格を帯びて、江戸時代は七、八軒の旅籠があった。

兜造り多層民家は江戸時代後期二百年ほど前の建物と推定され、当初は寄せ棟造りであったが、明治時代になって養蚕が盛んになると、屋根が改造され、妻側は兜造りに、平側にも採光と煙出し窓が作られた。現在2軒が残っていて、手前は民宿、奥の「旧遠藤家住宅」は県重要文化財に指定され、見学者に公開している。

雪国独特の造りの重厚な民家が雨に煙るたたずまい、集落前の溪谷の紅葉など、しばし写真撮影に時を過ごした。

・紅葉の仙人沢から湯殿山神社参拝へ

いよいよ出羽三山めぐりの終着点湯殿山の聖地へ向かう。かつて六十里越街道など険しい山道や峠道を歩いて詣でた日は遠く、今は有料道路で参籠所までバス。大鳥居の下のレストランで昼食をとり、さらにここから参拝用の専用バスで本宮入口まで行く。

本宮入口から徒歩。立ち並ぶ奉納された白い千枚梵天もポリ袋に包まれ、雨は止まないうが、雲が切れて視界は良く、紅葉した仙人沢が美しい。

御宝前の前で素足になり、お祓いを受けて中へ。ここからは芭蕉も「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」と読んだように、今も「語るなかれ」「聞くなかれ」と述べてはいけないうと戒められていて、神社の公式HPでも「湯殿は、湯殿山神社のご神体である出湯と、その湯ばなにおおわれた巨岩を示している。出羽三山の奥の院として、羽黒山・月山で修行した修験者が大日如来の境地に入る場所」と記すのみある。

専用バスで大鳥居まで戻り、最後に湯殿山参籠所で江戸期の湯殿山御本尊だった大日如来像を拝見することができた。

出羽三山丑歳御縁年に際して、鶴岡市金峰山青龍寺から特別に借りて展示された2体の大日如来像のうちの1体で、仙人沢行屋に安置されていた室町時代の作とされる木造の胎藏界大日如来坐像である。御縁年期間中、交代で展示されていた御宝前の鑄造製の大日如来像とともに、神仏分離前は三山信仰の中で最も尊崇されていた仏像であった。

山伏修行をされている方でお昼に挨拶に来られた草の根活動家の草島進一氏も「地元でもこんな美しい紅葉を見たことはありません」と言われたほど色とりどりに色づいた仙人沢の景観、そして丑歳御縁年特別事業で里



湯殿山本尊だった大日如来像

帰りされた湯殿山本尊の大日如来像の拝観は、この時でしか見られない貴重な経験であった。

午後1時20分雨の湯殿山を出発、山形自動車道で山形盆地に下り、笹谷峠から仙台平野に抜けると西高東低の冬型の気圧配置のせい、空はすっかり晴れていた。一昨日登った月山高原ラインも今日で閉鎖と聞く。出羽の山や里に降っていた秋の冷たい雨が深い雪に変わる日も、もうすぐなのかもしれない。

・旅をふりかえって

今回の旅は、八千代とその周辺のムラに残された出羽三山供養碑と、今でも一部地域で形を変えながらも続けられている三山講（奥州まいり）の歴史と民俗の背景を理解するためであった。

出羽三山は今も「現在・過去・未来」を体験する信仰の山であるが、神仏習合の時代に遡っての理解を深めるため、中世以前からの湯殿山修験の法灯を伝える真言密教の大日坊と注連寺、江戸時代の羽黒修験の中心だった天台宗系の荒澤寺まで足を運べたことは意義深い。

そして明治以降さらに盛んになった千葉県各地からの出羽三山めぐり。そこには、神仏分離の生々しい歴史があり、また遠くからの登拝を促す山伏や寺院、宿坊の企業努力ともいべき活動の実態も知ることができた。

かつて私は、高山植物や雪溪の景色を楽しむため夏山登山として月山山頂に登り、帰路、羽黒の五重塔と湯殿山神社を観光したことがあった。観光や登山だけでなく、今も信仰のための巡礼が絶えない出羽三山であるが、郷土史研究に関連して出羽三山信仰の歴史と民俗を知る目的という今回の私たちの旅は、かなりユニークだったと思う。

最後にこの旅の「先達」として、念入りに準備してご案内くださった村田一男会長に感謝いたします。